

Title	歌語りから「とよかげ」の部へ : 『一条摂政御集』の好古女関連歌を中心として
Author(s)	堤, 和博
Citation	語文. 1992, 58, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68839">https://hdl.handle.net/11094/68839</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 歌語りから「とよかげ」の部へ

―「一条撰政御集」の好古女関連歌を中心として―

堤 和 博

はじめに

冒頭に物語的部分をもつことで注目される藤原伊尹の私家集「一条撰政御集」の全体の構成は、図1に示した通りである。

図1

1～41番	【「とよかげ」の部】	【物語的】
42～192番	【他撰部】	
42～119番	【他撰部①】	【序跋を備える】
120～151番	【他撰部②】	
152～164番	【他撰部③】	【女性の独詠歌】
165～192番	【他撰部④】	
193・194番	【拾遺集】	【歌補遺部】

【一】内が私に与えた各部分の名称。以下、本稿ではこれらの名称を用いる。また、「一」内は各部分の特徴

さて、「とよかげ」の部では主人公の伊尹を「おほくらのしきょうくらはしのとよかげ」なる卑官の人物に仮託しており、伊尹程の貴人を大蔵史生ごときに仮託できるのは本人以外にありえないとの理由から、「とよかげ」の部伊尹自作説が定説となつてゐる。ところで、「とよかげ」の部は他の物語的私家集と比べて、主人公が架空の人物に仮託されている点だけをとつても、出色のできばえをほこつてゐると言つてよいが、他にも細かに読んでいくと特に詞書・後書に様々な趣向が凝らされているのに気付く。そしてそれらの趣向は、贈答相手の女性が誰であるかによつて八つの段に区切られる「とよかげ」の部の各段に、偏りをもつて凝らされている。どの段にどんな趣向が凝らされているのか、紙幅の都合上結果だけを次頁の図2に示しておく。

一見して「有」がV段までに集中しているのがわかる。このような趣向の偏りと、V段末尾（23番後書部分）には「そのをりはいとをかしとおもひけることゝも、ありけれど、ことなることなきひとのうへはみなわすれにけり。」という文があつて、これが1番の詞書の前にある序文（特に「をかしとおもひけることゝもありけれど

図 2

段	I	II	III	IV	V	VI	VI	VII	VIII
歌番号	1・2	3 7	8 11	12 20	21 23	24 30	31 40	41	41
後書	有	有	無	有	有	無	無	有	有
「伊勢物語」を 意識した言辭	有	有	無	無	無	無	無	無	無
登場人物の 心境に言及	有	有	無	有	無	無	無	無	無
語り手の感想	有	有	無	無	無	無	無	無	無
第三者の活躍	無	有	無	有	有	無	無	無	無

わすれなどして」の部分)に対応した跋文と捉えられること、それ

に、V段までの段からは一定のテーマが読み取れるのに対し、VI段以降の段からはテーマは読み取れないことなどを根拠にし、「とよかげ」の部はV段とVI段の間に構成上の切れ目をもつと私はかつて主張したことがある。そして、趣向の度合が極端に低いV段以下は、あるいは未定稿なのではないかという臆説も併せて示しておいた。

私は、「とよかげ」の部は伊尹自作であるとの定説にのっとり、伊尹がいかなる意図をもって各段を制作したのかを考察し、右の説を出したのである。また、曾根誠<sup>3)</sup>氏は、詞書・後書において趣向が凝らされていないVI・VII段の形、換言すると歌の詞書・後書ではなく歌の配列を最も重視した形こそが伊尹が本来目指していた歌物語の姿だとする私とは正反対の結論に達している。しかし、氏も「とよかげ」の部伊尹自作説に従い伊尹の意図を探究したのは私と

同様であると見受けられる。

このように従来は伊尹一人の手によって「とよかげ」の部は作られたとされてきた。が、今改めて「とよかげ」の部における趣向のばらつきをみてみると、あるいは伊尹以外の人の創意・趣向も「とよかげ」の部には加わっているのではないかと考えるようになった。それはII段に趣向が集中しているからである。II段は後述の通り、小野好古女との贈答を中心にして作られているのだが、実は他撰部の詞書における助動詞「き」の使用の偏りを考慮すると好古家は他撰部①の成立に特別の役割を果たしたと思われる、そういう好古家と伊尹の親密さからして、「とよかげ」の部の成立にも好古家が関与した可能性が出てくると私は考えるのである。

一 他撰部の詞書における助動詞「き」の使用

全百五十一首を有する他撰部の詞書はほぼ同じ文体で書かれているが、所々に変った形態のものもある。自ら事実であると確認している事柄を記述する際に用いられるとされる助動詞「き」の使用もめずらしいもの一つである。「き」は他撰部②③④には全く存在せず、他撰部①にも次の例(傍線部)しかない(後の論述の関係上、46・47・48・103・107番は歌も引用しておく)。

42	おなじおきなうたとてほかにみえしを、さかしらにつ、ましけれどとて(後略)
46	むらさきのふかきころものいろをだにみでわかれにし人ぞかなしき かへし
47	むらさきのいろにつけてもねをぞなくきてもみゆべき人しなれば
48	この御めのないしうせておほしなげきしに、人のとぶらひきこえけるに いま、でにそであらばこそなみだがは、やくみくづとなりしものを
52	のぶかたのきみうしなひたまたるに、ちじの大納言とのちのよにはきこえし、げみつのきみ

88	「こ、ろよりほかにちかはせたましか」などあれば「か、るをりにや」とてしふにいりてありし
103	ちかひてもなほおもふにはまけぬべしたがためをしきいのちならねば やないしまだいきたりしに、ふえたてまつれしに
107	そこふかくあやふかりけるうきはしした。よふえをもなにかふみ、む

これらの「き」はどのような所で使用されているのかみておく。まず、42番は他撰部①の冒頭にあつてその序文に相当する所で「き」が使われている。ちなみに、後略部が42番の詞書にあたる。46と48番と107番は「やさいさうのむすめのやないし」即ち小野好古(野宰相)の娘(野内侍)関連の歌である。また、52番と103番の「き」は注記の部分で用いられている。つまり、52番の私につけた読点の間は歌の作者「しげみつのきみ」に関する注記で、103番の「とて」以下はもとの資料(「しふ」)には鉤括弧内だけを詞書として103番歌が載せられていたことを断つた注記である。残つた88番の「き」は引用句中にあるので、今は考察の対象から除外しておく。

要するに、他撰部①において助動詞「き」は、引用句中の一例を除けば、好古家関連の歌と序文・注記でのみ使用されていることになる。こういう「き」の使用の偏りから、以下に述べることを私は考えるのである。

二 好古家関連の歌の特異性

最初に、好古家関連の歌の詞書で「き」が用いられているのは何を意味するのか考察する。結論からいうと、「き」の使用とこれから指摘していくことを考え併せれば、46・48番と107番は好古家の人物が纏めたものだとわかるのである。

まず、46・47番の贈答は46番の詞書によると、伊尹が四位に昇進した礼を述べに好古邸を訪れた際に交わされたものである。その中に「き」があるのは、伊尹と好古女との関係を知っていた好古家の人物によって詞書が書かれたためとみられる。

次の48番については、「一条撰政御集注釈」の「御め」に関する考察を参照したい。最終的に「御め」を（伊尹の）「御妻」と解する同著は、「め」は「女」とも同字であるけれども好古女に敬語が用いられるのはおかしいので、（好古の）「御女」とはとれないと説明する。しかし一方で、後に触れる107番の例を引き合いに出し、

この、四六、四七、四八の歌の資料となったものは、小野家の側の記録であったかとも考えられるのである。その場合には好古の娘は「御女」と記されることは十分考えられ、それをこの集の編纂者がそのまま受けついでたとの推定の可能性もあるのである。「御女」とよむことは一説として成り立ちうる。

とも述べている。私は、小野家の人が好古女を「御女」と呼んだという「一説」の方が妥当だと思う。なぜなら、「この御めのないし」は46番の詞書の中の「やさいさうのむすめのやないし」を受けて言っていることと読め、「この御娘の内侍」とする方が自然だからである。また、48番の詠歌場所も、46・47番に引き続き好古邸らしい。今何首か引いた歌からも窺えるが、伊尹は好古とも、好古女ともかなり親しい間柄にあったので、好古女の臨終の場に伊尹が立ち会った可

能性は大きく、それで死の穢を被ったために好古邸にしばらく留まり、「おほしなげ」いて詠んだのが48番だと考えられる。従って、48番は好古家の人物が好古邸で詠歌された歌を、「き」を使用しながら纏めたものであり、しかもその際に好古女を（好古の）「御女」と呼んだものと推定できる。

残った107番について「注釈」は、結果として「この歌を一往男の歌として解した」上で「女の歌として解することもできそうである」との見込も示している。このように解釈が揺れるのは詞書にある「ふえたてまつりしに」の部分がいっただい誰から誰に笛が贈られたことを言っているのか曖昧なためでもあろう。それで今は慎重を期して、

- A (笛の贈与) 伊尹↓好古女 (歌の詠者) 伊尹
- B (笛の贈与) 伊尹↓好古女 (歌の詠者) 好古女
- C (笛の贈与) 好古女↓伊尹 (歌の詠者) 伊尹
- D (笛の贈与) 好古女↓伊尹 (歌の詠者) 好古女

の四つの場合について検討を加えておく。

まず、AとBは「ふえたてまつりしに」を伊尹が好古女に笛を差し上げたと解するわけだから、伊尹には敬意が払われてなくて好古女には敬意が払われていることになり、敬語の使用法がおかしい。勿論、先ほど48番について検討した通り好古女に敬意が払われるのはありえることである。が、一条撰政伊尹には敬意が示されずに、好古女にだけ敬意が示されるのはやはり不自然である。

A・Bとは違ってCとDの敬語の使用法は自然である。しかし、Cは詞書と歌の内容がそぐわない。笛を贈られた伊尹が107番歌（「注釈」の訳は「底が深くてあやうく見えた浮橋の漂っている入江

のところまでも、どうして踏んでいって見たりしようか。」を贈るのは不可解である。一方Dだと、「注釈」が10番歌を女の歌と解した場合の類例として挙げる次の「後撰集」巻十四恋六・1023番歌<sup>5)</sup>とまさしく同様の状況で詠まれたものと理解できる。

とこのふかれがたになり侍りにければ、とどめおきたるふえをつかはすとて  
よみ人しらず

にこりゆく水には影の見えはこそあしまよふえをとどめても見  
め

そもそも、この例を挙げながらも、10番を好古女の歌と解するのに「注釈」が消極的なのは「女の歌だけがこういう詞書で独立してとられているというのはどうであろうか」という疑問によっているからだと見受けられる。10番の前後の歌は好古女とは関係のない歌で、確かに伊尹の私家集に女性の歌が単独で採られるのはやや奇異な感じがする。しかし同様の例は極めて少数だが他にもあるので、好古女の歌が単独で採られるのも決してありえないこととは言えない。

結局種々勘案すると、Dの妥当性が最も高く、10番は好古女が笛を添えて伊尹に贈った歌で、その現場を目のあたりにした好古家の人が「き」を用いて叙述したと考えられるのである。

### 三 他撰部①成立における好古家の関与

前節では他撰部①の好古家関連の歌は、好古家において纏められていたものが「御集」に取り込まれたものであることを確認した。

次に、その好古家の他撰部①成立において果たした役割について意見を述べていく。

まず、10番の注記について考えてみる。10番は、また後に触れるが、他撰部の配列からすると北の方恵子に贈った伊尹歌ととれる。しかし、「後撰集」巻十二恋四・886番には

よしふるの朝臣に、さらにははじとちかごとをして、又の  
あしたにつかはしける  
蔵内侍

ちかひても猶思ふにはまけにけりたがためをしきいのちならね  
は

とあり、同じ歌が好古に贈った「蔵内侍」の歌とされている。このことを根拠に「注釈」は、先程引用した部分の直前で「小野好古とその一家は、この集の成立のある過程でかなり深く関係していた」可能性を示している。後述する通り、10番の扱いについての私の立場は「注釈」とは異なるが、実はこの他にも他撰部①の成立に好古家が関わったことを示す徴証がいくつかあるのである。なお、「注釈」が「この集の成立」と言うのは私に言う他撰部全体を指しているとみられるが、10番は他撰部①に属し、これから私が挙げる徴証もすべて他撰部①にのみ関わることなので、他撰部②以下の成立にまで好古家が関与したとするのは言い過ぎであろう。

さて、他撰部①の編纂に好古家が関わっていることを示す第一の徴証は、先程来述べている詞書における助動詞「き」の使用の偏りである。「き」は序文・注記と好古家で纏められた歌の詞書のみ使用されているわけだが、序文・注記は他撰部①の編纂者によって書かれたものであると考えられる。すると、好古家の関係者が他撰部①を纏めたが故に、編纂者が実際に見聞した好古女関係の歌の詞書、編纂者の立場で書いた序文、それに編纂者が事実であると確認している注記事項だけが「き」を用いて記述されていると推定でき

る。特に103番の注記は前述の通り103番歌が実は好古に贈られた蔵内侍の歌であるからこそ加えられたのであり、かくのごとき注記を加えるのは好古家の人が最も相応しかろう。

第二は、前節で取り上げた107番の詞書の中の「やないしまだいきたしりに」というのが、46、48番に「やないし」死後の話が既に出てきているのを明らかに意識して書かれている点である。他撰部中では同じ人との贈答や同じ折の贈答、あるいは同じ歌が繰り返して出てきても、前に出ている歌を意識した言辭は差し挟まれないのが普通である。ところが107番の詞書は六十首も前にある歌を意識している。これも他撰部①の編纂者が好古家に縁のある人物だから起こった現象だと説明できる。

また、107番が好古女の単独歌なのに「御集」に取り込まれているのも、他撰部①の編纂者が好古家の関係者だとすれば不可解な現象ではない。

#### 四 II段成立における好古家の役割

伊尹が父師輔の五十賀を行った時に好古が屏風歌を詠進したこと<sup>(8)</sup>などから、好古と伊尹はかなり親しい間柄にあったのは確かである。そして、前節でみたごとく、他撰部①成立における好古家の役割をみると、一家が伊尹の文学活動に関わるほど特別に親しい関係にあったことがわかった。このような好古家と伊尹との親しさを踏まえた上で問題を「とよかげ」の部に移し、II段について考察してみたい。まずは、II段の全文を引用しておく。

みやづかへする人にやありけん。とよかげものいはむと

て「しもにこよひはあれ」といひおきてくらすほどにあ  
めいみじうふりければ、そのことしりたりける人の「う  
へになめり」といひければ、とよかげ  
をやみせぬなみだのあめにあまぐもの、ぼらばいとわびし  
かるべし

「なさけなし」とやおもひけん。

おなじ女に、いかなるをりにかありけむ。

4 からころもそでに人めはつ、めどもこぼる、ものはなみだな  
りけり

女、かへし

5 つ、むべきそでだにきみはありけるをわれはなみだにながれ  
はてにき

としをへて上ずめきける人のかういへりけるに、いかば  
かりあはれとおもひけん。これこそ女はくちをしようもら  
うたくもありけれ。

をんなのおやき、ていとかしこういふとき、て、とよか  
げまだしきさまのふみをかきてやる。

6 ひとしれぬみはいそげどもとしをへてなどこえがたきあふさ  
かのせき

これをおやにこのことしれる人のみせければ、おもひな  
ほりてかへりごとか、せけれ。は、女にはらへをさへな  
むせさせける。

7 あづまちにゆきかふ人にあらぬみのいつかはこえんあふさか  
のせき

「心やましなにとしもへたまへ」とか、す。女かたはら

いたかりけんかし。人のおやのあはれなることよ。

図2で示した通り、「とよかげ」の部でもⅡ段には特に様々な趣向が凝らされているのだが、ここでその趣向を具体的に確認しておきたい。後書があることや6番詞書に出る「をんなのおや」などの第三者が登場するのは明白である。その他では、3番の後書で「なさせなし」ととよかげが思ったであろうかとされ、5番の後書でもとよかげの心境に言及し、続いて「これこそ」云々と「女」に関する語り手の感想が述べられている。また、7番の詞書の中の「は、女にはらへをさせなむせさせける」は「伊勢物語」六十五段の言辭を明らかに意識しており、加えてこの一文は7番歌の内容には直接関わらず、歌の詞書というよりも、物語の地の文に似た様相を帯びている。最後の7番の後書でも「女」の心境が推し量られ、「人のおや」に対する語り手の感懐が示されているのみならず、心が「疾しな」と地名の「山科」の懸詞まで存在する。このように、Ⅱ段には、様々な趣向がみられる。

ところで、6・7番歌が「後撰集」の731・732番に「これまさの朝臣」と「小野好古朝臣女」の贈答として採られており、Ⅱ段は好古女との贈答を中心にして作られたものとわかる。では、特別に手が込められているⅡ段が、他撰部①の編纂に関与したらしい好古家関連の歌をもとに作られているのは単なる偶然であろうか。この問題を考えるにあたり、この段が実際に伊尹と好古女達との間に起こったできごとをもとにして「とよかげ」と「みやづかへする人」との話に仮託されて作られたのであれば、不審な点の一つあることをまず指摘しておく。それは、好古たちが娘と伊尹との関係を快しとしていない点である。先にも触れたが、後年伊尹は好古とも好古女

とも非常に親しい間柄にあったのに、なぜⅡ段では娘と伊尹との関係を好古たちが忌み嫌うのか。常識からしても、忠平・師輔の血統を受け継ぐ権門の一家の嫡子である伊尹が自分の娘に懸想してくるのは、好古夫妻にとっては喜ばしい事態であったはずなのである。Ⅱ段では内容的にも虚構が施されているとみるべきである。

では、その虚構は伊尹一人の創意によるものとしてしまつてよいであろうか。そこで唐突ではあるが、「伊勢物語」に関する渡辺実氏と片桐洋一氏の発言に注目したい。渡辺氏は、源融をバトロンとする風流歌人の仲間達が持ち寄った各自の歌の成立譚が、彼らの中核にいた業平一人を主人公とする歌物語の様相を帯びていき、原伊勢物語になったと唱えている。一方片桐氏は、源融バトロン説を完膚無きまでに否定するが、渡辺説の「歌人がグループとして集まつた場における語り」を「伊勢物語」の原点としている点<sup>(11)</sup>には共感を示している。融をバトロンとみるか否かを別にすれば、両氏は、原伊勢物語の成立の背景に複数の人々が参画する語り生成の場を想定している点で一致している。二人が原伊勢物語について考えている事情と全く一緒というのではないが、ある程度似た事情がⅡ段の背景にあると私は想定する。つまり、伊尹・好古女・好古夫妻などが集まつた場で（必ずしも集合していたとは限らず、使者を通じて歌がやり取りされたのかも知れないが）、伊尹がとよかげになりきつて好古女に懸想しかけることを端緒にし、好古夫妻も参加して作り上げられた歌語り<sup>(12)</sup>が、Ⅱ段のもとの姿であつたと思うのである。Ⅱ段成立の背景に以上のような事情をみるならば、Ⅱ段と同じ話題を扱った「宇治拾遺物語」巻三・「一条撰政歌の事」は非常に興味深い事柄を伝えていることになる。

今は昔、一条摂政とは、東三条殿の兄におはします。御かたちよりははじめ、心もちひなど、めでたく、ざえ・ありさま、まことしくおはしまし、また色めかしく、女をもおほく御覧じ興ぜさせ給けるに、すこし軽／＼におほえさせ給ければ、御名を隠させ給て、大藏の丞豊蔭となりの、うへならぬ女のがりは、御文もつかはしける。懸想せさせ給、あはせ給もしけるに、皆人さ心えて、知り参らせたり。やむごとなく、よき人の姫君のものとへ、おはししそめにけり。乳母、母などを語らひて、父には知らせさせ給はぬほどに、聞きつけて、いみじく腹立ちて、母をせため、爪弾きをして、いたくのためまひければ、「さるごとなし」とあらがひて、「まだしきよしの文、書きてたべ」と、母君のわび申たりければ、

人知れず身はいそげども年をへてなど越えがたき逢坂の関とてつかはしたりければ、父に見すれば、「さては、そらごとなりけり」と思ひて、返し、父のしける、

あづまちにゆきかふ人にあらぬ身はいつかは越む逢坂の関豊蔭見て、ほ、ゑまれけんかすと、御集にあり。をかしく。

ここでは、伊尹が実際に「とよかげ」と名乗って情事を重ねていて、しかも周囲の人皆がそれを心得ていたことになっている。勿論説話が伝えていることを俄かに信じるわけにはいかないが、「宇治拾遺物語」の内容は、私がⅡ段成立の背景にあると想定している事情とうまく重なり合う。つまり、まず「とよかげ」と名乗る男と好古女の間に関係ができる。好古たちはとよかげとは実は伊尹であるといわけている。しかし、権門の伊尹が娘に恋してくれたと喜んでいてはならず、あくまでも「くちをしきげす」である「おほくらの

しさうくらはしのとよかげ」が懸想してきたとして対処しなくてはならない。それで好古は、「とよかげ」と娘との関係を忌み嫌っているかのごとくに振る舞っているというわけである。いわば、伊尹の演技に好古家の人々も演技でもってこたえているといえよう。こうしてできあがった歌語りをもとに「とよかげ」の部のⅡ段は作られ、また、その歌語りの異伝を載せるのが「宇治拾遺物語」だと思ふのである。

そうすると、Ⅱ段において、先に見た趣向が凝らされているのも説明がつく。すなわち、「をんなのおや」など第三者が登場するのはまさしく女の親がⅡ段の制作に関わったからで、とよかげや女の心境について言及したり、「人のおや」に対する語り手の感想が述べられているのも、とよかげ（即ち、伊尹）・女（即ち、好古女）・人のおや（即ち、好古夫妻）が制作に関与したからだと考えればよい。

## 五 他の段についての類推

さて、Ⅱ段についての以上の考察が的を射たものであるならば、伊尹以外の人もその創作に加わった歌語りから「とよかげ」の部のⅡ段へという図式が描けることになる。それでは他の段についてはどうであろうか。

単なる類推に過ぎないという誹りを覚悟の上で述べさせてもらえば、Ⅱ段だけが例外で他の段はすべて伊尹一人の手によって纏められたとするのは不自然に感じられる。他の段にも何らかの形で、伊尹以外の人の創意・趣向も加わっているとする方が蓋然性が高いと

思うのである。

ではどういう形で、伊尹以外の人の創意・趣向が「とよかけ」の部に取り込まれているのだろうか。遺憾ながらⅡ段以外の段については具体的に指摘する材料を持たないのだが、他撰部にある幾つかの歌群を参考にして考えてみたい。それは、歌語り資料の集成とも言われている他撰部をみてみると、好古家以外の場所でも何らかのテーマに沿った歌語りが纏められていた形跡が指摘できるからである。そうすると「とよかけ」の部の各段のもととなった贈答も、それらのものと同様に、色々な場所で纏められていた歌語りであったとの考えも許されるであろう。

ところで、他撰部にある歌語りのなものと私が見なしているのは、例えば次に引用した伊尹の北の方の恵子関連の歌などである。

65	おほんとのきたのかたきこえたまけるに、御かへりな しとて つくまえのそこひもしらぬみくりをばあさきすぢにやおも ひなすらん そのほどのこと、もおほかりけれどか、ず。 あひたまてのちにやないしのもとこもりおはして、 「うちに――」とあるに、きたのかた
66	も、しきはをの、えくたす山なれやいりにし人のおとづれ もせぬ はやうのことなるべし。きたのかたとあじたまて「さ らにこじ」とちかごとしものどもはらひなどしてふ つかばかりありて

101	わかれてはきのふけふこそへだてつれちよしもへたるこ、 ちのみする 御かへり
102	きのふとも今日ともしらさずいまはとてわかれしほどの心ま どひに
103	(14頁下段参照) またきたのかたと「かぎりのたび」とておはしけるみ ちより
106	ゆくさきをおもふ心のゆ、しさにけふをかぎりといふにざ りける
170	やだいのいへにてひさしうおはせねば、うへ ねざめするやどをばよきてほと、ぎすいかなるそらにかき ねなくらん
184	このおとぎきたのかたとあじたまて、よかはにてほう しにならむとしたまふに、ほうし、て、あどの みをすて、こ、ろのひとりたづぬればおもはぬ山もおもひ やるかな
185	おとぎ、かへし たづねつ、かよふ心しふか、らばしらぬ山ぢもあらじとぞ おもふ
186	又、あどの なよたけのよかはをかけていふからにわがゆくすゑのなこ そをしけれ

これらの詞書や歌は次に列挙した特徴を備えている。

●65番と184番の詞書の冒頭で伊尹を指す語(「おほんとの」、「おとゞ」)が主語になっているが、こういう例は他撰部の詞書には他になく、また、184番のように「おとゞ」に「この」が掛かるのも詞書ではみられない。これらはむしろ「伊勢物語」や「平仲物語」の各段の冒頭が「この男」云々と始まっていたり、あるいは「とよかげ」の部の各段の冒頭が「とよかげ」云々や「このおきな」云々で始まっていたりするのに似ている。

●前述の通り、103番は「蔵内侍」の歌らしいが、66番も「後撰集」の117番では誰も知らない「をんな」の歌になっており、加えて、65番は他撰部の138番に重出し、そこでは誰かに贈った「おとゞ」の歌になっている。つまり、恵子関連の歌のうち、三首は異伝をもっていることになる。

●恵子関連の歌はすべて「あじたまで」や「かぎりのたび」とか、二人の仲が順調でない頃のものに限られている。すると、「そのほどのことゞも」云々となっている65番の後書は二人の蜜月時代の歌をわざと省いたことを、物語的省筆を装って断っているものと考えられる。

以上のことからすると、他撰部中の数カ所に散在している恵子関連の歌は、もともとは他人詠等も利用しながら、伊尹と恵子の仲がよくない頃にテーマを絞って作られた歌語りで、それが他撰部に取り入れられるまでに切れ切れになってしまったと推察できる。そして、「おほんとの」などの特殊な言い回しを考慮すれば、もとの歌語りが作られたのは、恐らく恵子の周辺であったとみられる。

また、具体的に指摘する紙幅はないが、この他にも他撰部には物語的な痕跡を止めている部分がある。(13)とすれば、「とよかげ」

「げ」の部が纏められる時、伊尹の周辺には伊尹を主人公とした歌語り、歌物語が様々に存在していたことになる。勿論それらのものが直接「とよかげ」の部の各段へと変貌を遂げたのではない。しかし、現在「とよかげ」の部の各段にある話柄も、もとは他撰部に散りばめられている物語的なものと同様に伊尹恋人達の回りで作られていた歌語りであったというのは充分にありえることである。

最後に、「とよかげ」の部の各段の趣向の凝らされ方にはばらつきがあるのはなぜか述べてみたい。図2に示した通り、Ⅱ段の他ではⅠ、Ⅳ段に趣向が目だつ。Ⅳ段も、師輔・伊尹と親しかった少弐命婦とのやり取りをもとにして作られている。Ⅳ段も恐らくⅡ段と同じく、少命婦などもその創作に加わって作り上げられたのだろう。そうすると、序跋を備えている「とよかげ」の部のⅠからⅤ段までは、ⅡとⅣの段を中核にして纏めようとしたのがそもそも伊尹の動機ではなかったろうか。それにすでにあった歌語りに手を加えた段を二三加え、Ⅰ段に序章的段をもってきて構成したのであろう。Ⅰ段には序章としてそれなりの趣向が凝らされているのも素直に理解できる。このように纏まりを示しているⅤ段までになぜⅥ段以下が加えられたのかは定かではないが、伊尹のまわりにはもはやⅡ、Ⅳ段のような手の込んだ歌語りは残っていないなかったのだろう。以上述べた事情を想定すれば、「とよかげ」の部では段によって趣向が凝らされていたり、凝らされていないかったりするのも納得できるのである。

注

- (1) 「二条撰政御集」の引用は「私家集大成」の本文に従い、歌句には濁点を、詞書・後書等には句読点・濁点・鈎括弧等を私に施す。なお、以下本稿では「二条撰政御集」を「御集」と略称する。
- (2) このあたりの単見は、「二条撰政御集」論―「とよかけ」の部の特質―(「詞林」二号・87年11月)、「二条撰政御集」の他撰部についての一考察―詞書を中心として―(「詞林」八号・90年10月)で詳述した。紙幅の都合上本稿では再述できないので参照願いたい。前者で述べた内容については、本稿で修正を加えることになる。
- (3) 「とよかけ」の方法―I段からIV段の検討―(大養廉編「古典和歌論叢」88年明治書院に所収)並びに「とよかけ」の方法(続)―V段からVIII段の検討―(「平安文学研究」第七十九・八十輯・88年10月)
- (4) 平安文学論説会・67年・鳩書房。なお、以下本稿では同書を「注釈」と略称する。
- (5) 勅撰集からの引用および歌番号は「新編国歌大観」による。以下、同じ。
- (6) 例えば、170番は北の方恵子の単独歌で、前後の歌は別人に贈った伊尹の歌になっっている。
- (7) 好古家関連の歌の詞書には「けり」も使用されている。ということとは、もともとは物語的叙述を目指していたものに、無意識に「き」が入り込んだのかもしれない。
- (8) 「拾遺集」巻五・賀・282番、「拾遺抄」巻五・賀・179番参照。
- (9) 「後撰集」巻十一・恋三、731・732  
女のもとにつかはしける これまさの朝臣  
人しれぬ身はいそげとも年をへてなどこえがたき相坂の関  
返し  
小野好古朝臣女
- (10) 「新潮日本古典集成・伊勢物語」―附説原伊勢物語を探る―(76年新潮社、元「源融と伊勢物語」として「国語と国文学」49巻11号・72年11月に掲載)
- (11) 「伊勢物語」の語り―源融パトロン説に触れつつ―(「伊勢物語の新研究」87年明治書院に所収、元「伊勢物語」源融パトロン説存疑」として「百舌鳥国文」二号・82年5月に掲載)
- (12) 岩波新日本古典文学大系「宇治拾遺物語古本説話集」による。
- (13) 例えば、本院侍従との贈答と思われる98・100番や113・119番等も物語的なもの

と想定しているが、具体的には別稿を期したい。  
 (14) 「師範集」98番、「御集」24番、「拾遺集」52番等参照。

〔付記〕

本稿は一九九一年四月二十日神戸女子大学において行われた和歌文学会第45回関西例会において発表した原稿に加筆修正を加えたものである。発表の当日または後日、様々な御批評をたまわつた片桐洋一氏、曾根誠一氏他の方々に感謝申上げる。それら御批評にどれほど答えられているか覚束ないが、ここに改めて掲載した次第である。

―本学大学院博士後期課程―